



山形新聞 少年少女の声 (11月19日より)

被爆体験 伝える大切さ 2年 安彦 琉唯

被爆ピアノを題材にした映画を見てから実物を見て学んだこと、感じたことがたくさんありました。

1つ目は、原爆を伝える活動についてです。「お母さんの被爆ピアノ」という映画は、被爆ピアノを通して原爆の悲惨さを伝える、「矢川光則さん」の物語でした。初めてこの活動を知りました。当時のことを知っている人は減っていますが、矢川さんのような人がいることで、被爆体験を風化させずに済んでいるのだと思います。2つ目は、自ら知ろうとする意識です。これも映画から学んだことで、主人公の菜々子は原爆や広島に住むおばあちゃんのことを知りたいと思っていました。ですが母はそれに反対で、菜々子を広島から遠ざけようとしていました。それでも菜々子はあきらめず、矢川さんと共に広島へ行き、おばあちゃんや原爆のことを知るようになりました。自分が知らないこと、知りたいことをあきらめずに追求していけば、きっと目標に近づけると思いました。3つ目は、戦争の悲惨さです。今までも十分理解していたつもりでしたが、被爆者や壊れた町の写真を見て、改めて戦争の悲惨さを感じました。多くの人を心身共に傷つけた戦争は、もう二度と起こしてはいけないものだと思えました。

コンサートでは、映画の中に出てきた矢川さん本人の話を聞くことができました。被爆体験を伝えていくことの大切さと共に、「平和の種まき」をしている矢川さんがとてもかっこよく見えました。映画を見て、被爆ピアノを見て、戦争や原爆に対してより考えを深められたし、私も成長できたと思います。

心に響いた 被爆ピアノ 2年 阿部 佑奈

9月に、「お母さんの被爆ピアノ」という映画を見た。そのあとに、「被爆ピアノコンサート」で被爆ピアノを実際に見て、その音を生で聴かせてもらった。映画では、就職試験を控える娘に、なぜお母さんが「被爆ピアノ」に関わらせたくないのか、理解できなかった。でも、後から考え直してみると、「被爆ピアノ」が生まれた広島への原爆投下は、決して軽い気持ちで受け止められるものではないということに気付いた。

そんな思いを持ちながら、10月に「被爆ピアノコンサート」があり、実際の「被爆ピアノ」に出会った。ピアノの音は、現在使われているピアノのなめらかな音とは違い、音が大きく、強く心に響いてくるように感じた。優しさとは程遠いピアノの音は、戦争の時代の、心の余裕のなさを表しているようだった。

あのひどい原爆の中で、「被爆ピアノ」が残ってくれたのは、奇跡だと思った。戦争の時代のことを知ってもらうため、矢川さんには「被爆ピアノ」とともに全国各地をまわり、「平和の種まき」を続けていってほしいと思う。

